西宮神社における神座との「近しさ」

後藤田　瑠美

二〇二二年九月三〇日

第一章　はじめに

大正十五年に国宝として指定された西宮神社本殿は、第二次世界大戦時に焼失の憂き目にあい、その後昭和三十六年に以前のままの姿で復興された。三連春日造で「西宮造」と言われることもある神社建築であるが、それが詳しくはどのような造りであるのかを説明したものは少なく、またその独特の造りが参拝者にどのような働きを及ぼすのかは考えられてこなかった。

「神座と自分との距離が近しい感じがする」というのが筆者が西宮神社を参拝した時の率直な印象である。その印象はいつ参拝しても感じられるものであり、拝礼の場に変わらずあるのは本拝殿の建築であったため、そこから及ぼされる感覚だと考えた。

西宮神社参拝時に「近しい」という印象を受けるのはなぜなのか。本論文ではまず、西宮神社本拝殿がどのような造りをもつ建物であるのか考察する。次に、建物のどのような部分が近しい印象をもたらしているのかを考える。さらに実際の祭礼において本拝殿がどのように活用されているのか、その活用が社殿と参拝者にどのような関係性を生んでいるのかを探る。

第二章　考察

筆者は西宮神社参拝時に神前との近しさを感じる。それは一体どこから来るものだろうかという疑問が、本論文の出発点であった。ここでいう「近しさ」とは、参拝時に本拝殿の建築や神前の風景を眺めて体感的に感じる印象のことで、「距離が近い」「明るい雰囲気」「親しみを感じる」などといった言葉で表現できる。

第一節　西宮神社本拝殿構造の概要

西宮神社の本殿が三連春日造という特別な形式だということは耳にしたことがあるが、それが特徴的に視覚として表れるのは屋根、すなわち三つ並んだ破風の部分であり、ほかに建築的には他の神社と比べて目立って特異な部分があるようには思われなかった。

そこで西宮神社の本殿と拝殿の造りを調べてみた。

春日造というものは多くが正面柱間一間の小型の社だという[1]。西宮神社も正面柱間一間社の社殿が横に三つ繋がって一つの建物となったものが基本形であると考えられる。繋がった三つの社殿（本論文においてこの部分を「内陣」と呼称する）の手前に、一段ずつ低くなっていく形で祭祀のための床が二種類設けられている（本論文において内陣に近い順に「外陣」「大床」と呼称する）。内陣と外陣、大床のすべてを内包する建物を「本殿」としている。

社殿の幅は、背面から見ると内陣一殿あたり柱間二間が取られている。正面から見ると一

間になっているのは神前中央に柱が据えられることを避けたからである。三つの社殿を繋ぎ合わせるための「合の間」という部分にまた柱間一間が取られているので、本殿の横幅は実質柱間八間という大きなものになる。

建物の高さは「軒高約五・五〇米、最高高さ約一〇・八五米[二]」で、建物の平面の大きさに対してバランスを取り、通常の春日造と比して大変高く作られていると言える。

社殿の奥行であるが、これも一殿ずつに分けて考えると、大床、外陣にそれぞれ柱間一間が取られ、内陣では柱間一間分の木階のさらに奥に神座となる（この最も奥まった、神体を奉安する場所を本論文において「内々陣」と呼称する）。拝殿から見ると本殿にはまず礎石の一部である石段が四段あり、その一段上が大床、さらに一段上が外陣、そこから急な角度で木階が上り、内々陣に至る。神を尊重する意思が十分に考えられる造りであると言える。

この同じ造りの社殿が三つ連結されているわけである。奥行きは柱間四間、横幅は正面柱間五間（背面は八間）にもなり横長の平面になる。

以上のようなことから、「三連春日造は正面柱間一間の春日造を三つ連続したものである」とただ説明されるよりも、実物は非常に規模が大きいものであることが分かる。本殿の規模の大きさについては「昭和九年西宮神社御造営竣工紀（ママ）念帳」にも「木割雄大にして外観頗る宏壮」と記されている[三]。しかも神を慮る十分な奥行と高さが設けられながらも、全体的に見ると横長で、あまり奥まった印象はないのである。

大床から石段を下りると斎庭が広がっている。斎庭は本殿と拝殿の間にある中庭で、石床張りになっており、露天である。斎庭の東西には板垣を伴った廻廊があるが、これは本殿の左右に付随した翼殿という小規模な建物から延びており、拝殿へと繋がる。斎庭を中央で横切る位置に門扉がはまっている。

拝殿は横長の平面をもつ建物で、その正面の幅は本殿と翼殿を合わせた幅にほぼ対応している。床はコンクリート敷設の土間造りで天井が高い。境内側には両開きの大きな格子扉が三つ並ぶが、斎庭に面した側は一切の壁がない吹き放ちの造りで、広く本殿を望むことができる。

以上が西宮神社本拝殿の概要である。本殿は三つの神殿を連結して奉ることにより大きな規模になっていることが分かった。斎庭の四方を建物が切れ目なくぐるりと取り囲む形であり、本殿内部を拝するには通常は拝殿正面の扉の前に立つことになる。

神体を奉安するための内陣、祭祀を執り行うための外陣と大床、参拝者のための拝殿、と神社に必要とされる施設が揃っており、この点については他の神社と大きな差異はないと言える。

第二節　「近しさ」をもたらすのはどの部分か

第一項　本殿奥行きの浅さ

それでは、本拝殿のどのような部分に西宮神社の特徴が表れ、それが「近しさ」と結びつくのであろうか。

ここでは本殿の奥行きに関して考察する。筆者は西宮神社参拝時に「本殿の規模の大きさに対して奥行きが浅い」という感覚を覚えた。奥行きが深い建物よりも浅い建物のほうが、その内部に存在するもの（すなわちこの場合神座）を距離的に近く感じることができる。

「本殿・拝殿平面図」（図1）を見ると、本殿は正面の横幅よりも奥行きが浅く作られている。しかも柱間四間ある奥行きのうち、半分にあたる二間は内陣である。内陣と外陣の間には通常御簾が下ろされるか、格子扉が閉ざされており、その奥に神が座すことを象徴している。参拝者が目にするのは大床と外陣、実質二間分の奥行きなのである。（祭礼時に御簾が上げられているのを目にした場合でも、木階が急な角度で昇っているため、奥行きというよりもむしろ壁のような、面としての印象を受ける）

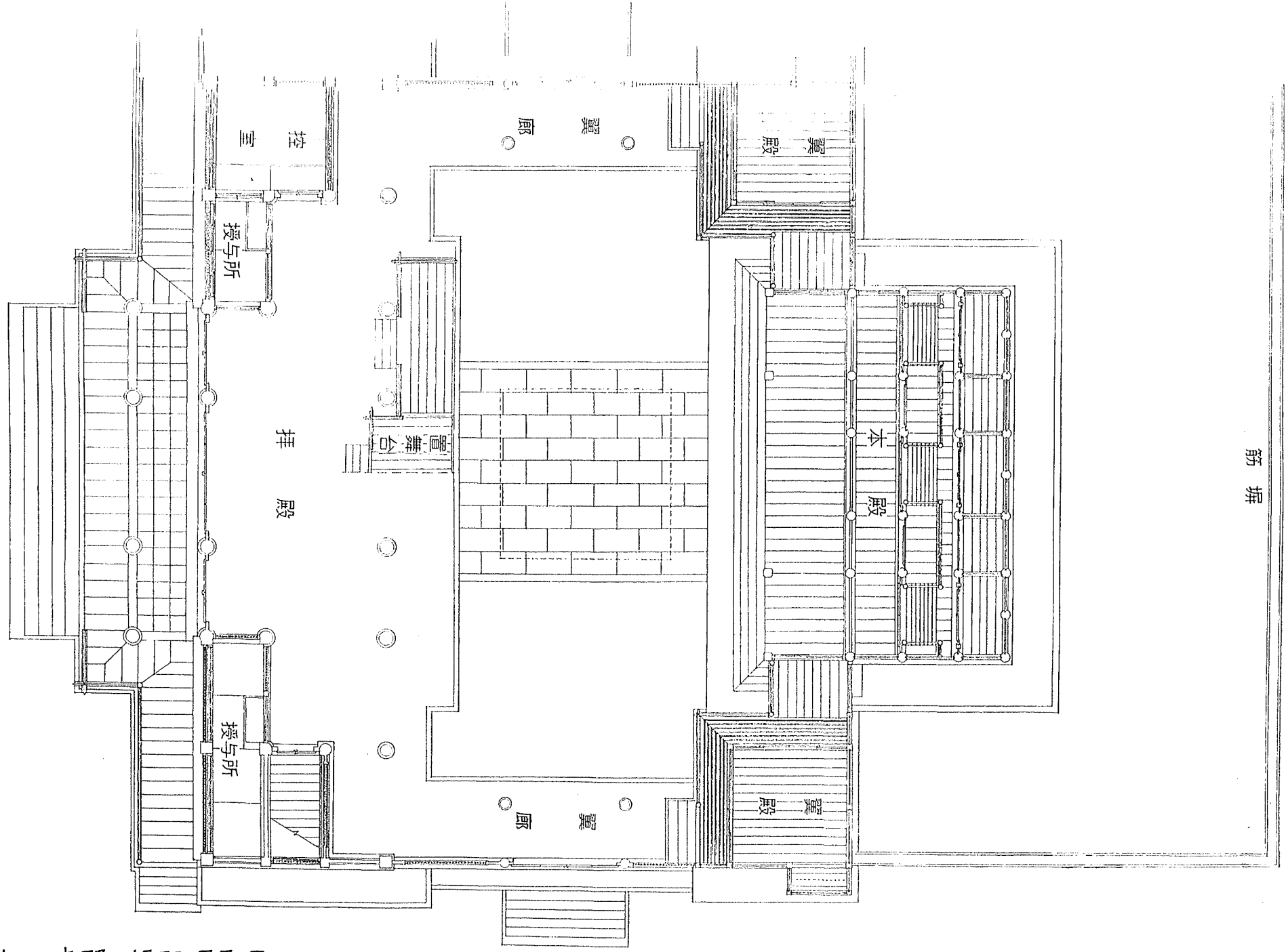
また基礎部分の四段の石段がよい働きをしている。大床はこの石段の上に載って高床になっているが、その床面は大人の胸上から顔ほどの高さにある。外陣も大床と一段しか高さが違わない。そうなると参拝者の視線とほぼ同じような高さになり、床面の奥行きは認識しづらくなる。

つぎに本殿の屋根の部分について考えると、庇が正面の幅いっぱいにある点に注意が向く。大床と基礎部の石段を覆うための屋根であるからそれだけの幅が必要になるのは当然なのだが、これがもし、中央の幅一間部分だけが前にせり出しているような形の庇であったとすれば、現在の形と比べて奥行きが増して感じられると考えられる。

三連春日造を特徴づけているとも言える切妻の破風部分であるが、「本殿・拝殿側面立面図」（図2）を見ると、大床の奥行三分の一ほどまで千鳥破風がせり出している。もう少し奥まって外陣の上に破風をつけ、大床部分の屋根をすべて庇として設計することも可能であったはずだがそうはされていない。

また三つの同型同大の破風が正面の幅いっぱいに隙間なく並んでおり、その前面に付随する庇もなだらかな傾斜である。これもまた仮定の話にはなるが、軒の高さが同じで、庇にもっと急な傾斜をつける造りであったならば、必然、庇のはじまりはもっと高い位置からになり、破風は小さいものになったであろう。庇の構造上必要かつ意匠としてなだらかな傾斜を取りながら、できるだけ大きく存在感のある破風としてデザインされていると考える。

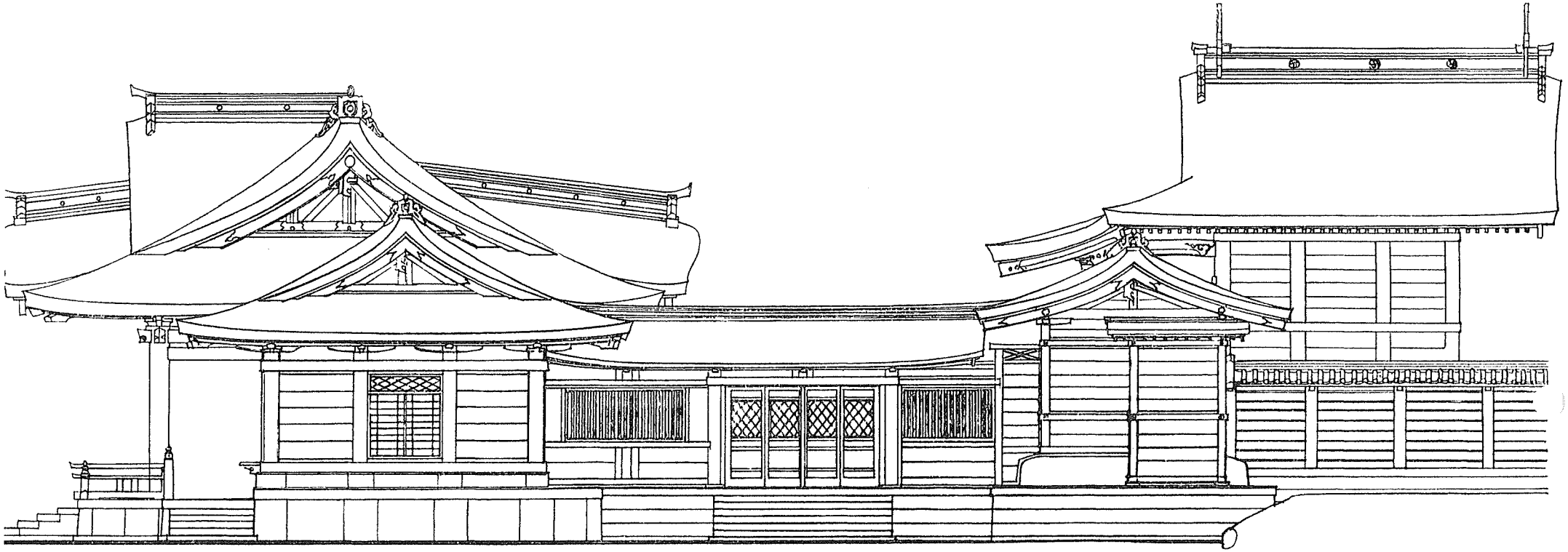
以上のように実際の寸法としても奥行きが浅い構造であるが、それ以上に社殿の設計からもたらされる印象として、奥行きをあまり感じず、神座が近い印象を受けるのだと言える。



本殿・拝殿平面図

図1　本殿・拝殿 平面図

出典：「西宮神社 復興造営誌」(1962)



本殿・拝殿側面立面図

図2　本殿・拝殿側面立面図

出典：「西宮神社 復興造営誌」（1962）

第二項　明るさと見通しのよさ

つぎに社殿の見やすさについて論じたい。西宮神社を参拝する人が拝殿から本殿を望む時、本殿およびその内部の様子は非常に伺いやすいと言える。

通常、参拝時には直に本殿を見られない、見えづらいという神社が多い。三浦正幸は「今日、大多数の神社では拝殿が本殿の前に建っており、本殿の姿は見えないのが当たり前になっている。本殿より拝殿のほうが大きいのが普通で、大きな拝殿の後ろに隠れている小振りな本殿の存在に気付かずに、そそくさと帰ってしまう参拝者の何と多いことか」「結局、拝んでいるのは拝殿であって、神様が住まう本殿を直接に拝んでいるわけではない」と述べている[四]。相原文哉も「側面にまわれば、本殿の存在は一目瞭然なのだが、正面からでは、本殿が見えないというのが各神社の一般的な状況である」「地元の産土神社であるのに、その本殿の造り（形）がまったく不明ということも少なくない」と述べている[五]。さらに付け加えるならば、側面から本殿を眺めようとしても、鎮守の森の樹木や本殿以外の建物の配置に遮られて外観がまったく窺えないというケースも存在するし、本殿正面を望もうとしても、拝殿や幣殿とぴったり連結されていて神前の扉や御簾しか分からないという場合もある。

そのような中で西宮神社は、参拝者が拝殿正面に立つと、本殿の外観ならびにその内部がはっきりと眺められるようになっている。

前項と同じく「本殿・拝殿平面図」（図1）を見ながら考察すると、まず挙げられるのは拝殿が斎庭に面して吹き放ちの造りになっている点である。拝殿の外側、境内に面した側は廻廊の垣と連なって本殿を囲う役割を担っているので壁や扉があるが、斎庭に面した側は柱が並ぶのみで大変開放的であり、拝殿の床は同じ高さで斎庭へと続いていく。また、拝殿に三つある格子扉は本殿の三つの社殿とまっすぐ相対する位置に開いている。

つぎに斎庭であるが、ここも一面広々として視線を遮るものが一切ない。そしてこの斎庭部分は露天になっているので日光が入り大変明るく、拝殿、本殿の内部をその明るさで見やすくしている。

続いて本殿内部の見やすさについて述べるが、その前に「本殿手前に垣が設けられる場合」について言及したい。

西宮神社本殿から近しい印象を受ける理由について、当初筆者は「三連春日造だからなのではないか」と考えた。つまり、「切妻の破風が複数連続するような社殿形式」であれば、同じような印象を感じられるのではと仮定したのだ。

そこで西宮神社と似たような本殿形式をもつ神社を調べた。まず見つけたのが京都市の平野神社である。「神社のいろは　続」において「社殿は春日造の社殿二つを並べ、それを連結して一体とした独特の社殿が2棟、並び建ち、平野造または比翼春日造とも呼ばれます」と紹介され、本殿と拝所正面の写真が掲載されている[六]。続いて奈良県吉野町の吉野水分神社は、三浦正幸が「全体として見れば九間社の流造とも言えるが、中央間は一間社の春日造のようで独立性が高く、その左右に合の間を加えて千鳥破風つきの三間社流造を連結した

形式である[七]」と社殿が三つ連なる様子を解説している。さらに奈良県田原本町にある鏡作坐天照御魂神社も三つの社殿を連結した形である[八]。

これらの神社はみな、本殿の屋根に破風が並んで西宮神社に似た形式の社殿と言えるが、西宮神社とは異なると言える点も持つ。社殿の規模の違いももちろんであるが、ここで取り上げたいのは「本殿手前に垣が設けられていること」である。平野神社と吉野水分神社は本殿の手前間近に垣と門のような拝所が設けられており、それらはひと続きで切れ目がない。鏡作坐天照御魂神社は本殿の正面中央には鳥居が据えられて開口部があるが、その左右には垣が巡り、それらは本殿と拝殿との間に位置する。

要するに、本殿を拝しようとする時、視線を遮る存在があるのだ。角南隆は各地の春日造で建てられた本殿の形式について「その前に廻廊とか塀がごく接近して立っていることも、春日神社（奈良市の春日大社を指す）のそれと全く似ているのが普通である」（カッコ内補足は引用者による）と述べている[九]。

西宮神社の廻廊も本殿に接近している部分はあるが本殿の前を遮ってはいないし、拝殿は接近していないと言える。本殿との間に斎庭を挟み、平面で見ても十分に離れていると捉えられるからである。なによりも本殿に参拝しようという時、拝殿の扉は常に大きく開いており、視界の妨げにはならない。例として挙げた神社とは区別できる。

拝殿、斎庭において遮られることなく本殿に到達する参拝者の視線であるが、これは拝殿設計時に計算されたことでもあると言える。第二次大戦で焼失した社殿を復興するにあたり昭和三十三年八月に発表された構想には「一、拝殿は参拝者の便宜をはかって建てるべきである。従って土間式に改め、本殿で執行する神事も拝殿から明らかに窺えるようにすべきである[一〇]」という一文が見て取れる。

さて、本殿内部の見やすさについてであるが、前項で述べた「本殿の奥行きが浅い」という点も、もちろん一つの要因である。

さらに言えるのは「本殿正面の開口部が大きい」ということである。大床は庇から床面までが解放されており、言わば大きな掃き出し窓のようなもので、あるのは四本の柱だけである。規模の大きい本殿で、社殿の背が高く（軒の位置が高く）、大きな開口部は露天の明るさを存分に受けているのであるから、必然、内部の様子はよく見ることができると言えるだろう。

本殿の内部についても言及しておかなければならない。

本殿の中で板扉が設けられているのは内々陣だけである。平素は内陣と外陣の間に格子扉が閉ざされるか、御簾が下げられているのであるが、基本的に本殿内で参拝者の視線を遮るような建具や調度品はこれだけだと言える。大正十五年に撮影された写真や昭和二年の本殿正面図[一一]、昭和三十六年に現在の本殿が竣成した際の写真[一二]などには外陣と大床との境に人の胸ほどの高さの衝立のようなものが設置されているのが分かる。これが神前にまで並べられてしまうと視線を遮る要素が増えてしまうのだが、昨今はあまり用いられていないと言ってよいだろう。

本殿において筆者が他の神社との違いを最も感じるのはこの「視線を遮るものの少なさ」だと言えるかもしれない。なぜこのように開放的なのだろうかとつくづく本殿を眺めて、最も外側にあたる大床の正面に、壁どころか扉や格子に至るまでの一切がはめられていないと気付いた時は大変に驚いた。

本項で考察してきたことをまとめると、西宮神社では参拝者の視線が拝殿から斎庭を抜け本殿に至り、礎石の石段、大床、外陣、そして神座のある内陣に到達するまでごく自然に、スムーズに流れることが分かった。それは拝殿復興時の設計意図と、西宮神社本殿が持つ開放感が組み合わさって演出されているものであるのだ。

第三項　本殿と拝殿の一体感

先に述べたように本殿の前面は大きく開口しており、拝殿も斎庭に面した側が吹き放ちの開放的な造りになっている。本殿と拝殿は翼殿および廻廊で繋がっており、それはすなわち、本殿と斎庭、拝殿をあわせてひとつながりの空間として捉えることも可能であると言うことである。実際拝殿前に立つと翼殿が切れ目なくつづくおかげで視覚的にも本殿が独立しているという印象はやわらいでいる。

大正十五年に撮影された写真で比較すると、本殿の左右に延びているのは屋根付きの塀だけで、現在の翼殿の位置より奥まったところにある[一三]。現在のものより、本殿が独立して建っているという印象を強く受けると考えられる。

本殿から拝殿までをひとつの空間として捉えられると述べたが、その場合、権現造という社殿構造になぞらえることができる。権現造とは京都市の北野天満宮などに見られる本殿の形式で、前後に並び立つ本殿と拝殿を石造りの床の「石の間」と呼ばれる空間で連結したものである。石の間の左右は壁になっており、その両側に扉がつけられている。

西宮神社の本拝殿を繋ぐ斎庭も石造りの床で東西に扉を備えている。この扉は装飾のためではなく、例年一月の十日えびす期間中には解放される。これは特別に本殿間近の斎庭上で拝礼した参拝者を通すためであり、他にも斎庭では舞の奉納が行われることなどもある。このように斎庭は「社殿連結のためだけではなく、神事の一部を担う」という面も持ち合わせているが、それはまさしく権現造の石の間でも見られる役割である。

さらにはこの「祭礼を行う空間を挟んで、奥に神の座（本殿）、手前に人の座（拝殿）」という構図は、西宮神社本殿内部の構造でもある。外陣で祭祀を執り行い、奥の内陣に神が座すが、手前の大床には神職以外の人間が参入することもあるのである。

このように同じような構造が、本殿から拝殿、もしくは拝殿から本殿へと繰り返され、あたかも入れ子構造のような様相を呈す。内外が連続して繰り返されていくかのような不思議な構造である。このような考えが思い浮かぶのも、西宮神社の本拝殿の造りに一体感があるからだと考える。

本論文でこれまでに述べてきた、本殿と拝殿が同じような幅の建物であること、本殿の三

つの社殿に相対する位置に拝殿の大扉が開いていること、拝殿から斎庭にかけての床が同じ高さでひとつながりに捉えられることなども、本拝殿の全体に一体感を醸す要因と言えるだろう。

第三節　本殿の活用

第一項　神職以外の人間の昇殿

本殿とは本来、「神様がお鎮まりになっているところ[一四]」とされる。本殿が小型の社殿である場合は内部すべてが神のための空間とされ、祭祀も本殿以外の場所（拝殿や幣殿、斎庭など）において執り行われる。西宮神社においては本殿の建築規模が大きいため、本殿内に神職が参入して祭祀を行う空間が設けられているが、これは比較的珍しいと言える。

三浦正幸が春日造の社殿の規模について「春日造は一間社が普通であり、三間社は希である。（中略）流造に比べて春日造は概して小型の本殿なのである[一五]」と述べている通りで、春日造の祖とされる春日大社の四つ並んだ社殿は小型で、内部に祭祀が行われる空間はない。

西宮神社の祭礼において大床と外陣は通常、祭祀の場とされる。祭主の祝詞奏上や、神職の拝礼が行われる場だ。神職以外は本殿に足を踏み入れず、拝殿にて参列するのが祭典の基本である。

しかし西宮神社では祭礼や神事の種類によっては、神職以外の人間、いわゆる俗人が本殿に上がる場合がある。通常の参拝よりかなり神座に近い位置に参入するのだ。

一例目は祭礼の奉仕員である。西宮まつりの神幸列に時代装束を身に着けて供奉する人たち[一六]や、献花祭において花を活けて奉仕する人たち[一七]などである。彼らは神事に携わり役目を受けている身であり、そういった意味合いでは神職に近い立場と言える。

二例目は本殿において祈祷を受ける人たちである。例年一月一日から三日と一月九日から十一日に限り、本殿に昇殿しての祈祷が行われている[一八]。彼らは一般的な参拝者で、純粋に祭神の加護を願って参拝している立場である。そもそも、一月のうちの六日間という限られた日以外は祈祷は拝殿や祈祷殿において行われる。西宮神社が「正月・十日えびすは特別に本殿にご昇殿」と案内している通り[一九]、「特別な」措置だと言える。

もちろん、他の神社でも特別な措置として通常よりも近い位置で祈祷を受けることはあるだろう。例として、筆者が二〇一九年一月一日に調査した、大阪府羽曳野市の誉田八幡宮を挙げる。誉田八幡宮は割拝殿形式の規模の大きな拝殿を持つ。通常時の祈祷はこの拝殿においての執行で十分に間に合うが、一月一日は祈祷の申し込みが多く、拝殿よりも神前に近い場所でも祈祷が行われていた。本殿前の石造りの浜床とでも呼べる空間で、そこは例祭時などには神職が座す場所である。

この場合の参拝者は西宮神社と同じように「神前に近い位置にいる」と言えるわけだがそ

れだけで「ほかの神社においても西宮神社と同様の『神座との近しさ』を感じる」とは言うことができない。なぜなら本論文でこれまで考察してきた「社殿の造り」とは違いがあるからである。誉田八幡宮の場合は浜床と本殿との間にはまだ距離があり、さらに塀と門で仕切られている（門扉は開いている）からである。西宮神社のように本殿に昇殿できるわけではないのだ。

西宮神社の祭礼に奉仕する一般の人たちや特別祈祷で昇殿する参拝者は、本殿の大床に参入する。外陣はあくまで神職が祭祀を行う場であり、俗人は立ち入ることができない。外陣と大床はたった一段しか床の高さに違いはないが、そこには神を敬うためのけじめが存在するのである。それにたいして大床は本殿の一部でありながら、神事に用いられ、かつ俗人も受け入れるというきわめて幅の広い活用をされている空間である。この大床の部分は西宮神社の建築を特徴づける重要な空間だと言えるだろう。

第二項　十日えびすの通り抜け参拝

西宮神社十日えびすの期間中である一月九日から十一日にかけては、本殿前の通り抜け参拝が行われる。

過去には斎庭東西の門を両方使用して通り抜けを行っていたと見られ、昭和三十六年に現在の社殿が造営された際、技師の松本芳夫が「当社の重大な十日戎の神事が透塀東西の唐門から参入出する大切な行事をその儘存続する為、廻廊東西を貫通出来る様にして[一〇]」と講演で述べている。

現在の通り抜け参拝は拝殿正面から入り、斎庭の奥、本殿石段間際まで進んで拝礼し、西側の門扉から退出する。

この通り抜け参拝で重要なのは、本殿のきわめて近くまで誰しもが行けることと、特別の申し込みなどが一切不要な点である。先に権現造の例として挙げた北野天満宮や、大阪市の大阪天満宮（こちらも権現造）でも日時を限って石の間の通り抜け参拝が行われているが、これらを希望する参拝者は申し込みの手続きが必要となる。それに比べて西宮神社は期間中（神事により閉ざされている時間を除けば）誰しもが自由に通り抜け参拝を行うことができる。大変開かれた措置であり、先の西宮神社宮司・吉井良隆に「生活にもっとも密着し、親しみのある人間性を備えた神[一一]」だと述べられたえびす神の祭礼としてふさわしい光景だと言えるだろう。

第三章　おわりに

これまでの考察を通して、西宮神社の本拝殿建築には特色ある設計がなされているということが分かった。規模の大きな本殿と神社として必要な施設を備えながら、そのそれぞれに開放感や見通しのよさ、神前が近く見えるような設計の工夫がなされている。また、本殿

と拝殿に一体感があり、入れ子構造のような建物どうしの繋がりから、内外両面の広がりを感じることができる。

さらには、限られた期間のみとはいえ俗人が本殿に昇殿できる点や、通り抜け参拝で誰しもが本殿の間近に進んで拝礼できることなど、開放的で参拝者に特別感をもたらす社殿の活用を行っていると言えよう。

以上のことから、西宮神社の本拝殿はその造りと活用方法の組み合わせで参拝者に対して「近しい」印象を与えているのだと結論づける。

本論文を通して、これまであまり詳しく紹介されることのなかった西宮神社本拝殿の造りに言及することができた。西宮神社に関する研究として、微力ながら知見を付与することができたかと思われる。西宮神社の神前に醸される「近しさ」という視点をもってして、今後の人々の敬神の一助になることができれば幸いである。

本論文は、そもそもの出発点が「筆者が感じた印象」という非常に感覚的なものだった。その感覚を客観的に論証する手法にたどり着かず、「近しさ」という主観的な感覚ありきで論を展開してしまった。「近しさ」という感覚をもっと詳細に分かりやすく定義することができればよりよい論文になったであろうと思われる。他にも昭和二年作成の「西宮神社本殿並ニ表大門實測図集」の原本にあたれなかったことを残念に思う。今後閲覧し、研究を深めていこうと考える。

さいごに、神社の建築やその成り立ち、社頭の維持のかたちには、それぞれの神社に由来や理由があり千差万別である。今回の論文執筆にあたっては論証のために各神社の建築や社頭の運用方法を比較したが、それらは決して各神社に優劣をつけるものではないことを書き添えておく。

一 三浦正幸「神社の本殿：建築にみる神の空間」吉川弘文館（二〇一三）p119

二 「西宮神社震災復興誌」西宮神社社務所（一九九九）p52

三 「昭和九年西宮神社御造営竣工紀念帳」（一九三四）p1

四 注釈一と同書 p235

五 相原文哉「社寺建築を読み解く」ほおずき書籍／星雲社（二〇一二）p12

六 神社本庁「神社のいろは 続：神社検定公式テキスト③」扶桑社（二〇一三）pp178—179

七 注釈一と同書 p163

八 注釈五と同書 p115

九 西宮神社復興奉賛会「西宮神社復興造営誌」西宮神社社務所（一九六二）p94「西宮神社御本殿について—想いおこすことども—」

一〇 注釈九と同署 p30

一一 「西宮神社本殿復興五十年記念誌 平成二十三年」西宮神社（二〇一一）p20

一二 西宮神社復興奉賛会「西宮神社復興造営誌」西宮神社社務所（一九六二）復興造営写真

一三 「西宮神社本殿復興五十年記念誌」ｐ２０と「西宮神社復興造営誌」本殿・拝殿平面図を比較

一四 神社本庁「神社のいろは：神社検定公式テキスト①」扶桑社（二〇一二）ｐ１６

一五 三浦正幸「神社の本殿：建築にみる神の空間」吉川弘文館（二〇一三）ｐ１１９

一六 「令和四年西宮まつり」リーフレット掲載写真

一七 社報「西宮えびす　平成三十一年新春号（通巻第五十号）」西宮神社（二〇一八）ｐ３

一八 社報「西宮えびす　令和二年新春号（通巻五十二号）」西宮神社（二〇一九）ｐ４

一九 注釈一七と同じ　ｐ４

二〇 注釈一二と同書　ｐ９７「新社殿の設計と施工」

二一 西宮神社・編「西宮神社」学生社（二〇〇三）ｐ１７３